特 253
589

町村圖書館標準圖書目錄

第二輯

十二年三月

廣島縣中央圖書館指定

廣島市立淺野圖書館

始

特253
589

まへがき

此の目録は縣下の町村圖書館に於て圖書選擇並に青年、壯年者に對して讀書の便を圖る爲めに編輯したものです。

本目錄に收錄せる圖書は、最近一年間本館に備付けた新圖書中より慎重調査の上、選錄したものです。

各圖書館は各自の事情に應じ、此の目錄を參考として圖書購入の時に便用せられんことを希望いたします。

◉印は文部省推薦圖書

昭和十二年二月

發行所寄贈本

昭和十二年 帝國圖書館藏書印

目次

哲學、倫理、宗教……一頁
教育、文學、語學……九
歷史、傳記、地誌、紀行……一九
政治、法律、經濟、社會、兵事……二九
自然科學……四三
美術、諸藝……四九
產業……五六

附錄

著名發行所一覽……五九

發行所一覽本

町村圖書館標準圖書目錄　第二輯

哲學、倫理、宗教

書名　皇國日本

著者　亘理章三郎著

發行所　目黑書店

形狀　四六判

價格　一、六〇円

本書は道德教育叢書の一として、わが國体の明徵に資せんが爲に著はされたものである。著者の言葉に別著「國民道德論概要」の「國家日本」と題する章に依り、更に詳に講述することゝしたとあるが、國體に關する著者多年の研究の成果の要領を示したものと見ることができよう。

著者は我が國が皇室の擴大して國家にまで自然に成長發展したものであること、即ち我が民族我が國家が皇室を本源とする一元の國家であることの意義及びその聚造以來の歷史的發展に於ける一元化の過程を詳細に規定し、之に基いて、國家の進展が革命によらず、皇室を絕對の中心とする維新的創造によること、皇國、神國、祖國といふ思想が我が國に於て完全なる統一を得てゐること、我が國家が眞に君民一體、祖孫一體の道德國家であることなどを、歷史を顧みつゝ種々の方面から論じ、西洋、支那との比較をも交へて我が國性を明かにしてゐる。

我が國體への自覺は今日強く要望せられてゐるが、やゝもすれば偏狹な思想が行はれ、我が國體の眞

意を明確に把握することは必ずしも容易でない。研究的基礎に立ち、しかも通俗的なる國體論として薦める。

幼學綱要講話

深作安文著　青年教育普及會　四六判　〇、五〇

本書は昨年著者が東京中央放送局から放送した講話を纏めたもの。幼學綱要に掲げられた德目二十一中から孝行・忠節・誠實・儉素・忍耐・貞操・廉潔・公平の八德目を選んで講義してゐる。著者は我が國倫理學界の元老、演題は有名な幼學綱要、一般に薦めて有益なることは勿論である。

工業道德

財團法人國民工業學院編　全學院　菊判三冊　各〇、四〇

本書は國民工業學院の創立當初、第一回の通信教授に於て、豫科半ケ年本科一ケ年半の講義錄に毎月掲載された「工業道德」の講話を纏めたもので、學院生徒の通讀の資に供すると共に、一般社會人の需要に應ずる目的で刊行されたものである。前編は一般道德のうちで特に工業道德の基礎となるべき綱目に就いて說き、後編上下二冊に於ては工業道德の本領を說くと共に、日本固有の道德を現代に活かすべき方途を力說してゐる。

現代女性信仰讀本

甲斐靜也著　熊崎閑田　四六判　〇、七〇

本書は若き女性、特に勤勞者階級に屬する女性を對象として彼等の心を宗教的信念に導かんとするもの。隨つて六ケ敷い宗教理論を避けて、極く平易に佛教聖典中の物語を掲げ、佛陀の教訓を實踐すべき日常の心がけを說き、その間に朗唱すべき聖句聖歌の類を點綴して、女性の情操の向上に資すべく努めてゐる。

現代社會と人格生活

吉田靜致著　目黑書店　四六判　一、六〇

著者が數年前青島の邦人教育者の爲になした講演の筆記を改訂增補して「道德教育叢書」中の一篇として發行したものである。先づ「人格の特性」に於て現在的生活と超現在生活とから生ずる人格の二重性、人格の有限即無限的生活を論じ、著者の所謂特殊即普遍主義に基いて人格の特性、道德の基礎を明かにし、次いで本書の主要部を成す「現代社會批判」に於て、社會乃至國家に於ける人格生活の眞諦を排他主義、自利主義、戰爭、愛國心、進化論、力政策、自由平等、社會主義、國際主義、ファシズム等の諸問題を說きつゝ、やゝ系統的に明かにしてゐる。平易な倫理學概論といふべきもので現代社會の批判に當つても、必ずしも我々の周圍に於ける今日の問題を、詳細に取扱つてゐるものではなく、この點からはやゝ物足らぬ所もあらうが、社會生活に處する根本的なる態度を敎へるものであり、特に愛國的熱情のともすれば偏しがちな現代の時勢に、人格生活の原理を與へるものとして一讀さるべきものであらう。

祭祀の本領

星野輝興著　日本文化協會出版部　四六判　〇、一五

神道は我が國民生活の古來からの指導原理であり、特に今日に於ては、日本精神反省の一般的風潮に伴つて各方面から種々に論ぜられてゐるが、その眞諦を正しく把握することは必ずしも容易でない。これを正しく把握するが爲には所謂神道の複雜多岐なる表現樣式とこれに關する論議を離れて、その成立の基礎であり、その指導的中心をなす所謂賢所神道の精神を顧ることは、かぐべからざる要件といはねばならぬ。

本書は僅か四十頁に滿たない講演の筆記に過ぎないが、宮內省掌典としての著者が、宮中の祭祀に參列し、祭祀に際しての大御心を拜察して得た感銘に基き、眞の祭祀の精神を傳へようとしたものであつて、得難い消息を傳へるものである。雲上奧深き所のこと必ずしもすべてをつくすことはできないのであらうが、我々はこれによつて祭祀の本領、從つて神道の純粹な姿にある程度まで接することができる一讀を薦めたい。

內的生命觀

吉田賢龍著　目黑書店　四六判　一、六〇

諫言耳に逆ふとは古來言ひふるされた話である。說敎や御談議と知つてこれに耳を貸す人も少いし、敎訓修養といふ嚴しい銘打つた書籍は斥けられるが例である。

然るに本書は久しく廣島文理科大學長であつた著者が其の深遠なる佛敎的人生觀をば極めて興味深く

且つ平易なる表現を以て大衆と共に味ふ態度を以つて語られたもので、所謂說敎に偏らず、理論に偏せず、極めて示唆に富む新修養書である。

所謂內的生命觀とは功利化された吾々の外面的活動の背後には全く功利を超越した自己目的の內的生命が陰に活動しつゝある事を力說高調されたものである。この內的生命の全的活動こそ萬德の根源であらねばならない。

敎育上の信念も、釋尊の自覺も、慈母の愛も、明朗なる人生も、乃至至純なる日本精神も、この內的生命の發現によつて純化されることを古今東西の史實、事蹟によつて餘蘊なく說述されてゐる。

活ける宗敎と人生

吉田清太郎著　雄山閣　四六判　一、八〇

「私は日本民族が、「財產」と「人」と「己」との上に生活の基礎を置く事は甚だ危險であると云ふ事を知つて、どうしてもその基礎を神と良心との二つに置かねばならぬ。と云ふ事を三十年間主張して今日まで參りました。」

とは、壯年の頃同志社に學びて甦の體驗をなし更に聖靈の內在を發見し、七十有餘の老齡を以て今尙基督敎の傳道に餘念のない著者の信仰談の最後を飾る貴重なる一節である。

本書は三編よりなる。第一編人生と宗敎は一昨年東京高等工藝學校に開催された人形講習會に於ける講演に加筆されたものであるが、極めて平易に日常生活を通じて神を見る法を說かれたものである。氏の所謂神とは天の一角に君臨する槪念的の神ではなくて、生々化育、萬物を統一し、一定の規律の下に

活動しつゝある大自然、大生命をば神の無限の知惠と威力と慈悲の顯現、神の榮光なりと信じこれを徧在の神と名づけて居る。次に我等は我に內在する神（良心）を發見し、祈りと感謝と努力を以て生涯を一貫すべきであると說いて居る。

第二編「信仰の眼に映じたる古今の人々」は本書の主篇で七十餘年の生涯に於て觀察し、師事し、面接した政治家、實業家、基督敎者、佛敎各宗高僧等の信仰生活を著者の深奧なる體驗によつて綴られて居る。

其の說く所極めて該博殊に基督敎者の身を以て深く臨濟禪の奧儀を參究して居るために宗敎家に有りがちな偏狹に陷らず、又夙に日本的基督敎を强調して居る等興味ある修養書として洵に好適であると信ずるものである。

日本的敎養の根據

佐藤得二著　刀江書院　四六判　一、〇〇

非常時を標語として國民を警策することは一時はその効果をあげ得るかも知れない。然しそれによつて眞個の自覺を呼びおこすことは不可能であらう。それは敵愾心を刺戟したり、排外思想の扶植によつて眞の愛國心を涵養することの困難なのと全く同一である。著者はとれ等を單なる憎惡等の副作用に過ぎず、非常時の解消と共に弛緩し、敵のなくなると共に消失し、結局は同胞互に相刻する危險あることを力說してゐる。

然らば眞の愛國心とは何であるか、「眞の愛國心、即ち敵國外患の有無にかゝはらず、絕えず滾々と

湧き出て來る愛國心は、逆說のやうではあるが、自國とか他國とかの對立を超越した博くて深い源泉を得て始めて、吾々の心情は國家百年の、否永劫の大計に堪へ得るものとなる。」と述べる。

さうした純眞の愛國心は如何にして涵養せしめられるか。これ本書が答へんとする所のものである。著者は先づ眞の愛國心は自國の自然的狀態の正しき認識を基調とすべきであるとなして先づ日本列島の位置、樣相、氣象、動植物、生命線等に一瞥を與へる。これが好條件に惠まれてゐると否とに關はらず、これによつて我等の愛國心はその目標を與へられる。

次に我等は同胞の過去現在及び將來に思ひを致さねばならぬとして第二章に日本民族の來所を尋ね、使命、國民性への反省を求めて居る。

最後にこの國土と民族の興廢を左右するものは「人の力」に外ならないとしてデンマルクをその危機より救つたダルガスやグルンドヰヒやクリステン・コルの生涯を叙し、我國にも國民的英雄出でよと叫んでゐる。

說明の材料としてあげられた日本列島、日本民族例話としてのダミエンのモロカイ傳道、デンマルクの話等別に珍らしくはないが言々悉く愛國の至情句々皆愛國の文字といつて然るべきであらう。著者は某專門學校の敎授であるといふ。青年の讀みものとして推稱に足ると思ふ。

人類の意思に就て

武者小路實篤著　岩波書店　四六判　〇、七〇

この世の中には驚ろく程澤山の人間が生きてゐる。そして中には隨分一生懸命に生きてゐる人々も決

して少くない。だがほんとうの生き方をしてゐる人といふものは存外多くはないのだ。

ではほんとうの生き方とは何か、それは人類の意志に適つた生き方、人類の（全體としての）完全へ向つての成長といふ永遠の目的に適つた生き方でなくてはならない。人間は生きる爲にいろ〳〵のもの――感覺や、心の動きや、快苦や――を與へられてゐる。それを石ころが地上にあるのと一般、事實だといつてしまへばそれまでのことだが、少し氣をつけて見るならばそこに眞に用意周到な人間を生きさせる爲の巧みが窺はれるであらう。これ程のことが無意味であらうとは思はれない。そしてすなほに純粹に生きんとするものならば、その事實の奥にこそ人間に何う生きて欲しがつてゐるかを感じないわけにはいかないのだ。

そのやうな意味での「人類の意志」と、それの望んでゐるほんとうの生き方の意味を、武者小路さんはその稀に見るすなほさと純粹さとを以て感得し、そしてそれをこの本の中で率直にいひ表してゐるのである。いはばそれは生ることの文學であつて所謂處世訓ではない。押しつけがましい教訓はこの本の本領ではないのだ。

だからこの本は別の生き方をしてゐる多くの人々にその生き方を改めさせる力を持つてはゐないかも知れない。しかしほんとうの生き方をしようとしてゐるある人々にとつてこの著者の言葉は大きな慰めでありまた力を與へて呉れるものである。出來るだけ多くの人がこの本を讀んで同感が持てればいいと思ふ。

家庭、婦人、兒童

高島平三郎著　平野書房　四六判　一、五〇

著者は久しく學習院講師として華胄界の子弟の教育に從事し、心理學の通俗化に貢献せる人として既に定評ある人である。

本書は著者が將に嫁がんとする松平直亮伯の令嬢及び高松宮妃殿下の爲めに家婦としての日常道德を御講述申上げた稿本に若干の增補をなしたものである。

內容は我國家庭の特色と婦人の地位より說き起し、次に家庭の經濟的方面、家庭和樂の精神的要素、婦道の根源となるべき同情の力につきて平易なる講述を試み、最後に將來の家庭を背負つて立つべき兒童並に青年についての婦人の着眼点を各其の心理に立脚して興味深く語られて居る。

本書の特色はどこまでも該博なる學識と人生体驗を極めて平易なる說話を以て說かれて居ることで、別に新道德若くは貴族の道德を云々したものではない。

前述の如く本書は貴族の子女に示されたものではあるが、一般子女の教養上にも極めて適切な修養書として推奬する所以である。

教育、文學、語學

世界の青少年運動

小尾範治著　青年教育普及會　四六判　一、三〇

一昨年の夏ハンガリー國ブダペストの郊外に於て第四回世界少年團大會が開催された。當時著者は同聯盟の依囑により派遣團を率ゐて大會に參加した。著者は各國の青少年が如何なる訓練情況にあるかをつぶさに視、尙大會の前後に亘り青少年運動に新正面を開拓した伊太利並びに獨逸を視察し、佛蘭西、英國、米國を巡歷して、歸朝後著者が隨時發表せるものを今ここにまとめたのが本書である。多趣味なる著者は故國を離れて大會に參加する迄の旅情と感想を俳句などに歌ひながら叙述してゐる。少年團世界大會參加記、ナチス化途上のドイツ、世界青少年運動の見聞記等、青少年運動關係者の一讀して然る可きものであらう。

子供とはどんなものか　波多野完治著　刀江書院　四六判　一、〇〇

著者は新進氣鋭の兒童心理學者である。わが國に於ける兒童心理研究の發達については序論「新しい兒童の見方」に於て實に簡潔明快に叙述してゐる。著者は最近の發達段階たる社會心理學の立場に立ち本書は「子供とはどんなものか」「子供と子供らしい行爲」「出來る子と出來ない子」の三篇に於て、著者の研究の成果を一般的理解に適するやうな形にして發表したものである。

兒童心理に關する書は近來頻繁に出版せられるが、本書のやうに簡明な叙述のうちに際立つた新鮮味を藏するものは見當らないやうである。普通一般の親たちが讀んでも理解し得るといふ程度のもので、これほどに學的水準を保つてゐる著作は少いやうにおもふ。

本書を讀んで世の教師父兄は何かしら新な意味をもつて子供の性行を理解し、教育上種々の暗示をうけることが出來るであらうと思ふ。

幼兒への理解　霜田靜志著　刀江書院　四六判　一、三〇

多くの子供は既に小學校に入學する迄にそれぞれの性質が決定し、快活な、人に對して親切な性質もひかんだ意地惡な性質も、或は涙脆く意氣地のない性質も、悉く誕生以來入學に至る迄の間の環境と共取扱ひによつて養はれるとみる著者は、子供の幼時期に於ける取扱の重要なことを認めて、母親になるべく分り易いやうに幼兒の躾け方を說いてゐる。著者は兒童教育者としての多年の体驗に基いて、最近の幼兒研究の立場から、多くの實例を示して、幼兒に對する正しき理解を進め、更に努力してその指導に當つてゐる。

篇中最もすぐれたる箇所は『母の希ひ、母の惱み』『問題の子供の取扱ひ』『良き生活訓練』等に含まれる。幼兒の性質或ひは性癖に對して母親の注意を喚起してゐる点にあると思ふ。母の愛が强ければ强い程それは盲目的であつてはならない、どこまでも母は幼兒の發育に理解をもつてよい取扱ひをしなければならぬと、諄々と說いてゐるところにある。

そこで著者は幼兒の「發育各期に於ける心理的取扱」として、嬰兒期の幼兒前期（生後滿一年から滿三年まで）と幼兒後期（滿三年から學齡まで）の三期に分つてその各期間に於ける心身の發育、育兒の方法の可否、幼兒生活の指導を實例に即して懇切に述べてゐる。次に幼稚園の使命とその保育の方法について述べ、幼稚園教育の協力によつて始めてその目的の達成せられることを力說してゐる。

尙最後に「母の問に答へて」と題して「幼兒に與へる玩具はどんなものがよいか」「童謠は嘘だといふ子供にどう答へたらよいか」「我儘で亂暴な子供はどうすればよいか」「幼兒の盜癖はどうすればよいか」等、種々の幼兒の教導に對する著者の言葉には聽くべきものが多い。

愛育讀本

倉橋惣三・齋藤潔・青木誠四郎 著　三省堂　菊判　〇、五〇

本書は恩賜財團愛育會の編纂にかゝるもので家庭教育教科書といつた體裁のものである。目次は序說「愛育のこころ」より「出生」「新生兒の身体と心」「乳兒の身体發育」「乳兒の榮養」「玩具の選び方と與へ方」「幼兒の身体發育」「幼兒の心の動き」「幼兒の榮養」「良い習慣」「健康なる幼兒」「乳幼兒の病氣とその豫防」「伸びゆく智慧」の十二章であり、三著者がそれ〴〵專門の領域に屬する部分を分擔して書いたものと思はれる。即ち出生より學齡に至るまでの乳幼兒の養育について、主として教育的な部分は倉橋氏が醫學榮養に關するところは齋藤氏が、心理に關するところは青木氏が分擔し、綿密な協同の下に執筆せられたものゝやうに思はれる。文章においても會話體の同一調を保つてゐる。

一通り要を盡してなか〳〵よく出來てゐると思ふ。隨所に寫眞或は圖解を入れ、また要所に表示を掲げ、必要に應じて脚註を施すなど、一九〇頁の冊子風の体裁のものに盛られてゐる內容は相當に豐富であり、家庭において養育に關し知りたいとおもふことは一通り懇切に述べられてゐる。活字も教科風に大きく、讀みよいし、家庭教育上まことに便益な、一本を各家庭に備へさせたく思はれるやうな本である。

熱と愛との結晶まごころ

村上寛 著　文友堂　四六判　一、〇〇

收むる所親の愛五話、子の思慕二話、兄弟愛、友の愛、鄕土愛、社會愛各一話、純情によつて子を發奮せしめたる母の愛、親を慕ふ可憐な少年の話、わんぱくの兒を改心せしめた弟の友愛、共同一致の愛鄕心によつて小學校の改築を完ふした話、五十五年世の嘲罵と戰つて架橋を實現した社會愛、何れも氏の靈筆によつて小學校の改築を完ふした話、五十五年世の嘲罵と戰つて架橋を實現した社會愛、何れも氏の靈筆によつて悃々として讀者の胸に迫り來るものがある。

理知に訴へて愛を語ることも一の方法には相違ないが、情を以て人に迫ることはより以上に人を感動せしむるものである。さうした意味に於て本書は愛に飢えて居る現代人にとつて一つのオアシスとなるであらう。

萬葉讀本

佐々木信綱 著　日本評論社　菊判　一、五〇

昭和七年十一月に著者は「萬葉集概說」と題する一書を著はし既に文部省の推薦する所である。今回の「萬葉讀本」はこの前著に比して內容に於て殆ど同一であるが、體裁に於て稍々異り、今回の「萬葉讀本」は書名の通り菊版十二ポ組といふ如何にも讀本風のものである。述記は前述も可成平易なものであつたが今回のも前著と同じ樣に、或は前著以上に平易なもので、この点著者が萬葉學の當代最大權威たるのと相俟つて、萬葉入門書として欲くる所がない、今回の「萬葉讀本」には挿繪が加へられてある

ことは、前者に比しての特徴と云へよう。が、前者に於て附錄としての卷末に附せられた「萬葉集作者部類」(作家の五十音順に從ひ歌數と國歌大觀、白文萬葉集、教訓萬葉集に於ける歌の所在番號を示したもの)が本書には除かれてあるのは稍々惜しい氣がする。

綴方讀本

鈴木三重吉著　中央公論社　菊判　一、六〇

「一校の成績を卜するには全校兒童の綴方の作品を見よ」とは久しい以前から小學校の視察要項の一として掲げられて居る。蓋し綴方は諸學科の綜合による兒童の創作であり、指導者の側よりは最も指導難を訴へらるゝ學科だからである。而して其の困難の大半は教ふるものにも教へらるものにも適當な標準が見出せないからである。

本書は正にこの綴方教育上の缺陷を補ふものである。十有八年前より「赤い鳥」を創刊し、綴方、童話、兒童歌謠の根本的革正のためにその半生をさゝげ來つた著者が「赤い鳥」の入選作の優秀なるものを一冊にまとめ、綴方の標準を示した一大金字塔であると云つてもよい。

本書に收められた作品は、五十六篇で、兒童獨自の叙智と純情と鮮鋭な感覺を如實に表現した作品、小さきものゝ人生觀には時に微笑をさそはれるものもあるし、時に又深刻なる反省の資料となるものもある。

取材はあらゆる方面に亘り、各篇には著者獨自の透徹せる、然かも詳細な批評が附せられて居るので何人も各篇の特異性を知ることが出來る。それ故に本文は兒童の副讀本としても好適であり、批評は指

導者への好指針である。

下篇の「綴方と人間教育」は教師の綴方指導方針に對する痛烈なる批評に始まり、次いで製作指導の要点、綴方の教育的意義に及んで居る。純文學の立場に立つ著者と、所謂教育を其の觀点とする一般教育者との間に於てはその出發点及び目的に於て見方の相違はあるであらうが、他山の石とするに足るであらう。

實地指導者による指導書は頗る多い。然も本書の如く學校教師のみならず、兒童並に心ある父兄に呼びかけたものは尠い。半生を綴方教育の向上に委ねた著者は已に地上を去つたのである。その書は遺著としても顧みらるべきものである。

續爐邊夜話

乾信一郎譯　松柏館書店　三六判　一、〇〇

昭和八年三月同じ譯者による「爐邊夜話」が春秋社から出版され、本年三月同社の文庫版として「爐邊夜話」「續爐邊夜話」二編が同時に出版された。こゝにあげたのはその「續爐邊夜話」である。前編に收められたものと同樣續編中のものも、東京朝日新聞に連載され愛讀された諸編であつて、ひとしく動物の自然生活に關する物語である。本編には十七の物語が收められてゐる。作者名はいろ〳〵であるがチャールス・ロバーツのものが多い。そしてそのロバーツのものが特に巧みで、おもしろいやうである。

これらの物語は勿論仔細な自然觀察にもとづいてゐるところもあるではあらうが、作者の自由奔放な想像によつて作りあげられたものであらう中にはあまり人間化されたと見えるものもあるが、實に美し

い迫眞性をもつまでに出來上つた作品もある。例へば獺と山猫との爭ひを題材とした「淵」などは、自然の靜寂をしいんするまでに傳へてゐるものである。

その他構成の妙あるもの、自然と人間とのひそやかな交渉を描いて見せるもの、やさしい、ほゝえましい自然描寫といへるもの、その他一つ〳〵そのよさを語らなければならない樣な興味ある諸短篇であつて、文字通り卷を措く能はざらしめる面白い物語集である。讀者は下手な小說集などよりもずつとずつとひきつけられて讀みをへてしまはないわけには行かない。そして或は小說を讀むにも增して自然をおもひ、人間の生活をおもふ心を引き起されないとも限らないのである。

雨の念佛

宮城道雄著　三笠書房　四六判　一、五〇

失明の樂人宮城氏が藝道に勵める辛苦三十有餘年の體驗に基いた藝術觀、人生觀、乃至は作曲のゆかりとなつた自然及び人事百般の回想錄であり、紀行集である。內田百間氏は本書を一讀して「全卷三十二篇を通じて、色彩の描寫が全然ないのは勿論である。徹頭徹尾、音と聲と靜寂との世界である。我々は宮城氏の語る雨垂れの音、風の音、浪の聲き等によつて、目明きの知らなかつた自然の神秘と啓示に導かれるであらう」といつてゐるが蓋し適切な批評である。近時異色ある讀物として江湖に薦めたいと思ふ。

花鳥草紙

新村出著　中央公論社　四六判　一、八〇

數多い新村博士の隨筆集のうち、これは純然たる隨筆集の觀あるものである。標題のやうに草木花鳥に關するものが多い。「桑の歌」「思ひ出す樹木」「樹木の名と實」「七葉樹」「柿の葉」「雲雀隨筆」「天なる雲雀」「雀隱れ」「黑つぐみ日記」「小鳥の聲にひかれて」等々、ちよと題目を拾つてみても、このやうな工合である。

草木花鳥の隨筆といつても、博覽强記の博士の事なれば、事毎に專門の語源語史にふれ、それからそれへと古書をひらき故事にふれて語りきかせ、つきるところを知らないのである。あるときは思ひ出を旅によせ、感慨を歌にひいて興趣橫溢、讀者は著者溫容にひきゐられて思はず讀み耽けらないわけには行かない。著者は本書中のどこかで自らを「漂白のデレッタント」といふやうなことばで評せられてゐたが、このことばは却つて悠容春の海のやうな著者の人格を思ひしのばせて床しかつた。暑夏閑をぬすんで、このやうな境地に遊ぶ事も快事であらう。

文學讀本　春夏の卷

島崎藤村著　第一書房　四六判　一、五〇

前著「秋冬の卷」の姉妹篇であつて、おなじ島崎氏の編纂にかゝるものである。三月より八月にいたる春夏の季節に寄せ月別に配列して、体裁全く前編と同樣である。

全体として見ると、本編には自然觀照の文章が多いやうである。前編には人及び人生に關する思索的な色合が濃いやうにおもはれる。これも季節による編纂の自らな現はれであらうか。また前編にはどこ
となく老成の藤村が映つており、本編には青年の藤村が寫つて居る氣がするともいへようか。然しと、

に見る青春も華かな青春ではなく、なんとなく憂愁の青春であるらしい事も、作家藤村の本質の反映であらうか。とまれ前編と同樣香氣高い良い文集である。

文化と大學 ―法學隨想―

帝國大學新聞社 編　帝國大學新聞社出版部　四六判　一、二〇

さきに公刊された科學隨想「研究と世間」及び文學隨想「書と散歩」は爾來多くの讀者に愛讀されてゐるのであるが、今度は主として法學者のものされたものを集めて法學隨想「文化と大學」として世に提供された。收錄するところ三十一篇、試みに卷を開けば勞頭先づ牧野英一博士の一流の美文で「法律を解釋論として研究しようとするときわれわれは、法律を賢こきもの美しきものとして理解したいとおもふ。」といふ書き出しで述べられた文化主義の法律論があり、それに續いて穗積重遠博士の「法律家の祈り」と題する「願くは我等をして善き法律家たらしめ給へ。善き法律家たるによつて善き人たらしめ給へ。善き人たるによつてよき法律家たらしめ給へ。」の一句で結ばれた人間趣味の法律論がある。其他田中耕太郎博士の「トルストイと我等」、美濃部達吉博士の「學生の思想生活」、杉山直治郎博士の「世界法の理論を讀む」、末弘嚴太郎博士の「水泳王國の建設と日本泳法」、勝本正晃博士の「釣と法律」、中川善之助教授の「東北・凶作・身賣」等何れを見てもこの人ならではの珠玉の文字ばかりである。裝釘も無裝純白の紙裝で清楚なもの。

歷史、傳記、地誌、紀行

大楠公記

社會教育會編　同會　四六判　一、〇〇

序文に前山周信氏の執筆にかゝるとある。前山氏は少壯の南朝史研究者。本書は史實に即して楠正成の事蹟及びその國史に於ける意義を通俗的に明にしようとしたものである。

二篇に分ち、前篇實蹟篇で主として楠正成の事蹟を取扱つてゐる。先づ楠氏の活動の前提となつた當時の歷史的情勢を明かにするため、承久の變以來の公家幕府の事情を概說し、討幕の計畫が屢々失敗して笠置遷幸となり、正成の活躍を見るに至つた事情から、鎌倉幕府の滅亡、建武中興を經て、足利氏の謀反により、遂に正成の戰死に至る迄を述べ、その間幕府の大軍を千早の孤城に引受けて屈せず、諸國勤王軍の蜂起を促し、幕府の崩壞を餘儀なくせしめた正成の智謀、尊氏を西に敗走せしめた機略、淺川に於ける決死の勇戰、それらを貫く正成の誠忠を興味深く知らしめる。行文は平明、叙述も巧みで、しかも傳說は傳說として取扱ふといふ周到な用意も見られる。

後篇は遺烈篇として、楠公の人物、楠公の一族のこと、楠公の諸傳書の批判、楠公の近世尊皇思想、明治維新に及ぼせる影響を述べてゐる。口繪も多く、地圖もあり、附錄として當時の略年表、參考書の簡單な解題が添へてある。

歴史的研究の基礎に立ち、しかも通俗的なる楠公傳として廣く一般に奬めたい。

青年賴山陽

木崎好尙著　章華社　四六判　一、五〇

賴家の三珠樹と唱はれた春水を父に、春風、杏坪を叔父に又媒颸夫人を母に持つて生れた山陽は、云はゞ生れ落ちるときから學者たるべく約束されたようなものである。そして外祖父飯岡義齋は大阪では朱子學派の町儒として同時に町醫として知られた人であり、母媒颸の妹梅月は尾藤二洲に嫁してゐる。それのみか當時淺野藩を代表する儒家としての父春水は、江戸に京大阪に、その交りは廣く、當代の碩學文人はすべて春水の友であり、その何れもが少年久太郎（山陽）の文才を知つて之を愛でた。その中には菅茶山も居た。柴野栗山もゐた。浦上玉堂父子、古川古松軒、伊澤蘭軒、大槻磐里、同平泉何れもそうであつた。

十八の年、父よりの贐「遡志齋集」一卷と母の短冊を笈に收めて江戸に遊學、翌十九歳の折に歸藩した。これ迄の山陽は平和な學者の家庭に寧ろ平凡に育つたのであつた。が、江戸より歸つての青年山陽は、遂に勃々たる雄志を抑へ切れず二十一歳の秋廣島の生家を脱走して京に上つたが、間もなく廣島に連れ歸られて幽屏久しきに及んだ。この間、快醫の念を晴らす爲にしきりと文筆に親しみ、日本外史の初稿を始め幾多の稿を成した。三十一歳の暮、請はれて父の友菅茶山の廉塾の教授として備後神邊に赴いた。然し間もなく神邊も去つて京に上り、遂にこゝに永住するに至つたのである。

本書は山陽父祖の代より筆を起し、滿三十歳の暮、備後神邊の菅茶山の村塾に赴く迄の青年期を扱つ

たもので、著者は山陽研究家として當今隨一である。隨つて本書は如何にも資料の豐富さを思はせる記述の仕方で、文章は平易簡潔にして讀み易い。引用された山陽その他の詩文書簡は漢文のものはすべて讀み下し文に書き改められ、意味不明の個所は必要に應じて著者の補註が加へられてある。記述は資料を中心にして著者の主觀に依る所は少い。山陽を傳するには誠に人を得たものと謂ふべきである。

福澤諭吉傳

石河幹明著　岩波書店　四六判　一、五〇

著者の傳記々述者としての態度は、一般の傳記作者の陷り易い感傷的誇張の弊に墮せず、飽くまでも嚴密な史實記錄の主義を守り、先生の筆になる文章、記錄、書簡の類を夥しく引用して、先生自身をして先生の生涯を語らしめるといふ態度をとつてゐることも、傳記記述の上に一の好模範を示したものといひ得るであらう。

先年刊行された「福澤諭吉傳」全四卷は、學界に嵐の如き絶讃を以て迎へられたのであるが、しかしながら、同書は餘りに浩瀚なるの故に、一般的に普及せしめる点からは、必ずしも不便がないとは言へないのである。著者も固より此点に氣付いてゐたので、「續福澤全集」の編纂を終るや更に筆硯を新にして、一般讀書子のために讀み易い手頃な福澤先生傳を著はさうとして著述に取掛り、遂に今回四六版五百頁の「福澤諭吉傳」を刊行することになつたのである。

記述の序列は大體、四卷の大傳記と同樣であるが、單に義の大著の繁を省略したといふだけのものではなく、全篇新たなる起稿に係るので、前者に於て博引旁證、各種の文獻をして數十頁に亘り事實を說

明せしめてゐるところを、本書に於ては氏自身の筆を以て僅々數頁の中に其大要を活寫し、或は數行の章句を以て簡潔に斷定を下し、全體として極めてコンクリートなこくのあるものとなり、前著に比し氏の主觀的な味が甚だ濃厚に出てゐる。

單に福澤先生の生涯を全面的に見ようとするには、寧ろ此小傳記の方が遙かに讀み易く且つ面白いであらう。且つ資料の方面に於ても、殊に先生の肖像寫眞は、前回の大著の刊行以後に發見せられたものを悉く網羅して、多くの關係寫眞と共に、隨所に挿入してあるので、記事を補つて自ら讀過の興味を增さしめてゐる。

日本女性鑑

大日本聯合會婦人會編　同　會　四六判二卷　各一、二〇

昭和九年東京に開かれた文部省主催の「我等の日本、皇國史大展覽會」に於て、日本女性の鑑としてそれぞれの場面を展覽に供せられた史上の女性二十五人につき、その傳記・事蹟を詳述したものである。選ばれた女性は時代順に擧げれば、弟橘媛・大葉子・上毛野形名妻・光明皇后・法均尼・清少納言・紫式部・巴御前・尼將軍政子・阿佛尼・松下禪尼・楠正行母・瓜生保母・山內一豐妻・細川忠興妻・木村重成妻・春日局・加賀千代・乳人淺岡・運月尼・野村望東尼・和宮內親王・奥村五百子女史・水兵の母・乃木靜子夫人である。

光明皇后の御慈悲心、幕末多難な時勢に際して護國の女神となられた和宮內親王の御事は措いて、烈婦、貞女、賢母、才媛等何れも、その偉れた資質をその境遇に應じて遺憾なく發揮し、日本女性の眞髓

を示したものである。別に新研究があるわけではないが、讀者はこゝに擧げられた代表的女性の事蹟を通じて、そこに一貫する日本女性を感得出來るであらう。

精神的・物質的に不安定な社會事情に應じて、種々複雜な婦人問題を生じつゝある今日、眞に日本婦人として生きる道を見出すために、本書は尠からざる參考となるであらう。叙述も平明で、讀みよいものである。

北方への旅

アン・リンドバーク著　深澤正策譯　改造社　四六判　一、五〇

昭和六年夏、北太平洋を横斷する新航空路を開拓すべくリンドバーク夫妻はワシントンを出發、カナダ、アラスカ、千島を經て霞浦に飛來し、遂にその目的を貫徹した。全行程に約一箇月を費してゐる。更にそれより南京まで飛び、折からの揚子江氾濫に救濟會委員會に參加し、三回に亘る調査飛行をなし遂に漢口では愛機が江中で顚覆し、夫妻は救命浮標をつけて濁流に投ずるの危險をすら冒した。この大飛行が米阿空の連絡上に如何に大きな礎石を置いたものであるかは言ふまでもないが、更に年一回の船便しか有しないカナダ、アラスカの奥地に對する有効なる交通路を示した所にも重大な意義がある。

本書は無電技師としてこの壯擧に參加したアン夫人自から貴重な體驗を筆にした空の旅行記である。いかにも流暢にして澁滯のない筆致であり、且つ女性らしい細やかな觀察豐かな感受性を隨所に示してゐる。カナダ、アラスカの荒涼たる風物の描寫、わが國の藝術に對する敏感な理解、揚子江大氾濫の叙述など女性にめづらしい達意の文章である。

深澤氏譯文もまた原書を傳へるに十分の注意と用意を經てゐることが覗はれる。

俳句教程

荻原井泉水著　千倉書房　四六判　一、五〇

本書は著者の唱導する自由律俳句の立場から俳句の全般に亘つて平明懇切に解說した俳句入門の書である。俳句を詩の一形体として見る著者の廣い自由な立場は本書の中に餘すところなく說述されてゐるやうに見える。俳句を先づ第一に詩として見ることから入らうとする人々にとつては重要な示唆を與へる好箇の入門書とならう。既に定型俳句に進みつゝある人々にとつても、俳句が詩としての反省を迫られつゝある今日、本書に一顧を與へることが決して無意義ではないとおもふ。

著者は自由律俳句についてのみ說くのではない。古來の定型俳句についても終始一貫して說き及んでゐる。俳句歷史的發展の上に立つて、文學として俳句が自由律俳句に進展せざるをえないことを說いてゐるのである。俳句の傳統的二大約束は定型と季題とであるから、本書に於てもそれの排棄が第一の重要な論点とならなければならない。さらに自生律となりし場合の構成或は音律が最大の重要論点とならなければならない。それらの点については縷々說述してゐる。かくして著者の企圖する自由型態の俳句が新しき自然印象詩として、古來の俳句道の發展であることを說いて終つてゐるのである。卷末に自派の俳人の作を評釋して參考に供してゐる。

◉二宮尊德傳

佐々井信太郎著　日本評論社　四六判　二、〇〇

著者は報德社の重鎭であり、尊德翁研究の權威である。昭和七年「二宮尊德全集」を刊行した。本書は全集編纂にあたつて思ひ立つた二宮翁事業概觀といふべきものであり、いはゞ尊德全集の壓縮であるそれだけに本書はその事業の記述については群書を拔いて詳細を極めてゐる。生立より終焉に至るといふ傳記体をとつてはゐるが、各地に於ける仕法の次第が特に詳密に記述せられてゐるのである。本書の特色價値も全くそこにあるといつてよい。文書の引用にあたつても、これを現代文に近く書き直し、出來る丈け讀み易くはしてゐるが、本書は必ずしも讀み易く興に乘つて讀みつゞけることの出來る本ではない。むしろ讀むに艱難を感じるほどの本であるが、讀者はこれを忍んで熟讀含味すれば、事業の實際の中にいふべからざる教訓と實地指導の暗示を得ることが出來るのである。本書は尊德翁の一生を丹念に木彫に刻んだやうな印象のものである。

願くは農村青年諸君も進んで本書を繙き、その事業の實際を仔細に探究して、實際生活に役立てるやうにせられたいとおもふ。

地名の研究

柳田國男著　古今書院　四六判　一、八〇

我々は單に見聞する地名ばかりでなく、極めて密接な關係のある地名さへ、それがどういふ意味を有つた名であり、どういふ由來を有つてゐるかを知らないでゐる場合が大多數であらう。然し如何なる地名と雖も漫然と付けられたものはなく、何等かの程度にそこに住む人間の生活に關係ある意味を負うてゐることは言ふまでもない。しかも我が國の地名は、著者によれば極めて多く、他國に類を見ないほど

であるが、古來からの殆んど無數ともいふべき地名を調べて、正確なる結論を導き出すことは決して容易でない。從來とても或は地理學上から、或は古代語の研究等に關聯してなされた研究もないではないが、極めて少く、殊に地名の原意を尋ねて、それを裏付けた人間生活の一面を示さうとする試みは稀なものと言ふべきであらう。

著者は周知の如く、我民俗學の創始者、地名の研究はその文化人類學の一部としてなされたもので、從來所々に發表されて來たものを本書に纏めたのである。著者が地名の研究に手を染めてから三十年といふが、その間の苦辛は得難いものである。讀者は地名の意義、地名研究の方法、地名に使用される主要な言葉の意味等の一斑を知ることができ、單に地名に興味を有する者のみならず、鄕土研究家、ひいてはわが國人の生活文化の研究者に役立つ所は多大であらう。

日露戰爭秘史中の河原操子　福島貞子著　福島四郎　四六判　一、二〇

本書は日露戰役に於ける隱れたる功勞者河原操子女史の傳記を叙述したもので、女史が日露間の戰機熟するや挺身北京に入り、更に蒙古の奥地喀喇沁の王宮に王府教育顧問となり教育の事に從事する傍、我が陸軍の重大任務を帶びる特別任務の志士の活躍に應機の援助を與へたことが記述されてゐる。なほ卷末に河原女史自筆の「旅日記」六篇が收められてゐる。女性の讀物として上乘のものである。

孔子の生涯　諸橋徹次著　章華社　四六判　一、〇〇

本書はラヂオの「朝の修養」として前後六回に亘り全國に放送された講演の筆記である。七十四年の孔子の生涯を六講に分つて大略年代順に、孔子の人と爲り、還境、思想、教育事業、及び孔子歿後の儒教發達の經路を述べたものである。

我々は孔子と云へば直ちに論語を想ふ。それ程孔子と論語とは切り離すことの出來ないもので、孔子の教へ、孔子の生活記錄はすべて論語の中に壓縮されてゐると見るべきである。この意味で本書はさきに同じ著者に依つて著された「新論語講話」(これもラヂオの放送講演)の姉妹篇と見るべきで、前著が論語を中心として儒教精神を說いたと同樣、本書も孔子の生涯を錄することに依つて儒教の根本思想をその中に浮び上らせようとするものである。

孔子の教は平實中正の實際教であつて、別段特別の形式に依る修道を云はず、日常我々の實生活の中に正しきを求めて行く教である。これにつき著者は「道は中庸に存する。水と米の飯とには甘味も辛味もありません。併し、其の特別な味のない處に、實は特別の眞の味が籠つて居ることを忘れてはなりません。私共はこの際矯激を誡め制節を尙ぶ爲にも、特に儒教の如き平實中正の教へを奉じたいと存じます」と云つて今の世に適合する教へであることを力說して居られる。尙卷末には附錄として「老子の話」と云ふ一文も添へられてあるが、之も名著解說としてラヂオに依り放送されたものである。著者は文學博士で又東京文理科大學教授である。

高橋是清自傳　高橋是清著　千倉書房　四六判　一、八〇

高橋翁が我が國經濟界の元老として老軀を顧みず國家財政の難局に奮鬪し、その暢達の風格にもかゝはらず、不慮の災厄に遭つて斃ぜられた悲運はまことに遺憾といはねばならない。我々は更めて翁の足蹟を顧み、その功績を銘記すべきであらう。

本書は高橋翁の口述を「翁の側近に在ること二十餘年」と云ふ上塚司氏が筆記し、更に翁の檢閲を受けたもので、「先に東京●大阪朝日両新聞社より發表されたものを、今回更に全内容を整備し、訂正し」たものであるといふ。翁の生ひ立ちから、日露戰爭前後の外債募集に活躍した頃までを詳細に述べてある。

翁が晩年の地位と風格とを築かれるまでの前半生はまことに「波瀾重疊、數奇極まる」ものであつた。仙臺藩の寺小姓から選ばれて洋學の修業に志し、慶應三年僅か十四才で養祖母の許を離れて渡米し、奴隷の境遇にまで陷り、歸國して間もなく大學南校の教師となつたのを始め、幾度か官職を變へ、事業を企て、やがて專賣特許制度の確立に盡して初代の特許局長となり、また忽ちペルー銀山の事業に失敗して落魄に涙を呑み、「小僧からやり直す心」を以て實業界に轉身し、銀行事業に力を致して、困難なる外債の募集に功を成すに至るまで、實に目まぐるしいほどの變轉を見せ、得意、失意、悲喜交々至るの有樣で、近頃めづらしく興味ある傳記である。

しかもこれを通じて、天眞素直なる心情、不屈なる樂觀、人に接して虛心、事に當つて無私なる精神が遺憾なく發揮されてゐる。翁の行績をそのまゝ我々の手本とすることは出來ないであらうが、人それぞれの境遇に於て受けとる教訓、激勵は多大なるものがあると思ふ。叙述は平明輕快である。

政治、法律、經濟、社會、兵事

帝國憲法制定の精神

歐米各國學者政治家の評論　金子堅太郎述　〇、一〇—〇、三〇

帝國憲法は我が建國の體に基き、廣く海外各國の成法を斟酌することを精神として制定せられたものであることは、明治天皇が明治九年九月時の元老院議長有栖川宮熾仁親王に下し給ふた憲法起草の勅語によつても明かに拜察せられるところであり、それはまた今日我が憲法を解釋するに當つても寸時も忘れることを許されない原理たるものである。もとより苟くも日本臣民たるの自覺を有つものにして、我國體を忘れひたすら西洋の學說に心醉する如きものがあらうとは思はれぬが、近時憲法學說をめぐつて特に國體の明徵が問題とせられねばならぬ如き事態の發生したことは、われら日本國民として眞に憂慮に堪へぬことである。

この時に際し昭和十年七月中旬、文部省は主として大學高等專門學校の法制修身擔當の教職員の爲に憲法講習會を開き、帝國憲法起草者の一人でしかも今日唯一の生存者であられる金子堅太郎伯爵より親しく憲法制定の由來を聞く二度得難き好機が設けられた。

金子伯爵は當時八十三歳の高齡に達してをられ、しかも前年の大患の後であるにも拘らず酷暑中二時間の長きにわたつて、帝國憲法の起草者が如何に日本の歴史を重視し國體に深く留意したかを說き去り

說き來つて聊かも疲勞の色を見せられなかつたことは、偏へに伯爵の憂國の至誠の現れとこの講筵に列したものの齊しく感激したところであつた。

本書はその講演の速記に伯爵の訂正補筆を得て上梓したものであつて、文部省は本講演の內容が出來るだけ多くの人に讀まれ以て國體の明徵に役立たん事を望んで同省自から一萬五千部を配布した他、尙日本文化協會、青年教育普及會、東京日日大阪每日新聞社其他數箇所の出版業者に印刷發賣を許して之が普及をはかつてゐる。

世界經濟の常識

小島精一著　千倉書房　四六判　一、〇〇

本書は「前世紀以來の世界經濟の展開をその基本線に沿ふて發展的に考察し、それによつて現下の世界恐慌と經濟國家主義の本質とを歷史的な背景の下に檢討しやうとした」ものである。第一編「現代世界經濟の基本的な分析」、第二編「世界大戰後の世界經濟」、第三編「最近世界經濟の特質」の三篇となつてゐるが、その第一篇が「序」にいはゆる「世界經濟の基本的な知識を極く判り易い形で、いはゞ教科書風な氣持で叙說したものである」といふのによく當てはまる。國際經濟の原則的な事柄を、世界大戰前の經濟事實に基き、具体的に說述してくれたものであるが、慾をいへば初學者にはいま一層懇切な詳說が欲しかつたやうにおもふ。第二篇以下は世界經濟の苦難史の展開であつて、第二篇は復興期より合理化の時代までを大体取扱つてをり、第三篇は一九二九年の恐慌以後統制經濟の擡頭より最近に至るまでを取扱つてゐる。著者の見地は統制經濟の過程を合理化の過程の變質發展と見る見地であつて、經

濟國家主義としての特性を顯著ならしめてゐるのである。

叙述は主として歐米並に日本の經濟事實につき、世界的に、發展的になされてゐるものであるから、各國の事情が纏まつて明かにされるわけには行かない。また國によつて精粗のあることも免れない。しかしながらありあまる材料をこのやうに簡明に整頓して叙述することは容易なわざではあるまい。しかもその叙述・大體ジヤーナリスティックに澄澈としてゐるから興味もあり讀んで具体的に知識を得ることが出來ると共に、經濟國家主義的傾向の必然的發展性をよく理解することが出來るとおもふ。

農村問題解說

栗原藤七郎著　明文堂　四六判　一、〇〇

本書は「農村問題と現代の經濟、社會、政治、文化等との關係を明瞭にし、農村問題の文明史的意義を國民の出來るだけ多くに充分に認識せしむる」ために、「農村問題を綜合的に一括して論述した書」である。題目を見ても「農村問題の意義」「農村問題の起因」「農村問題の重要性」「社會思想と農村問題」「農村問題の對策の概要」といふやうに、全般をつくしてゐる。たゞ最後の農村問題の對策を說くところは序文でもいつてゐるやうに、紙數の都合上ほんの要項を示すに止まる程度になつてゐるのは惜しいが、入門の手引になる。

「起因」「重要性」「社會思想」の各章に力をいれ、殊に「起因」の部分は各方面より觀察して餘蘊なきに近い。「重要性」の一章は本書の特色と見られるものであつて、社會學的に、文化史觀的に、整つた說明を與へてゐる。「社會思想と農村問題」との章では著者の思想的立場を示してをり、序文でいつてゐる

「著者は、大体に於て、進歩的立場に立つつもりである。しかし左右両翼の急進的改革案には贊成し難いものがある。社會は謙讓と相互扶助に依つてのみ進歩すると、吾々は体驗的に信ずるからである。」といふ態度を明かに見てとることが出來る。本書が農村教育を重要視してゐることも一特色である。

本書は總じて篤實な著述であつて、入門書としては頗る適切なものである。

政界人物評論

馬場恒吾著　中央公論社　四六判　一、五〇

著者の人物評論は劇中の人物にしんみりと温かい理解をさせて呉れる、謂はゞ苦勞人の茶話を聽くといつた感がある。本書現代の人では岡田前首相、齋藤、高橋、林、床次、後藤各相に及び、過去の人では明治史上の人物にも亘つてゐる。時局の人を知るばかりでなく、政界への穩健な認識を具へるためにも、特に青年諸子の一讀に値すると思ふ。

聖德太子十七條憲法講話

曉烏敏著　日本放送出版協會　四六判　一、五〇

推古天皇十二年四月、當時の皇太子で攝政でましました聖德太子の定められた憲法で、その憲法が十七箇條あるので普通十七條憲法と稱へられてゐる。我國成文法の初めで、それ以後今日まで千三百餘年の間に出來た日本の主な法令でこの憲法の影響を受けてゐないものは殆んど無いと著者は序文にいつてゐる。本書はこの憲法を頗る平易に講ぜるもので、國民に必讀を薦むると共に町村國書館には是非一書を備へられんことを希望する。

明治天皇と立憲政治

渡邊幾治郎著　學而書院　四六判　二、五〇

天皇機關說が八釜しい問題となり、これを攻擊する人々は異口同音に、法學者は西洋の糟粕ばかり受賣をして、我國の歷史を知らぬから斯る怪しからん議論をすると批難するが、敢て憲法學者といはず、一般の法學者は、議論の當否を論ずる前に、歷史的研究に付ては多少の弱點を有するは、蔽ふべからざるの事實である。

特に憲法に付ては、我國の歷史といふよりも憲法制定の歷史そのものさへ知るの手掛りがなかつたのである。從つて唯だ『憲法義解』の說明と、歐米の法理論とに由り議論を組立つ事の外はなかつたのであるこれは憲法學者の短處といふよりも、その史料を知るを得なかつた學界一般の責任といつても然るべきである。

然るに、昨年からは、幸ひに幾多の好書に惠まるゝの機運が到來した。その第一は、伊藤博文編秘書類纂『憲法志料』の出版であり、その二は鈴木安藏氏著『憲法の歷史的研究』『日本憲政成立史』『日本憲法學の生誕と其發展』であり、更らに最近に淺井清氏の『明治立憲思想史に於ける英國議會制度の影響』が出で、憲法史學界は百華一時に妍を競ふの壯觀を呈した。

此の間に在つて、更らに別箇の立場から、嶄然群を拔いて居るのは、渡邊幾治郎氏の著『明治天皇と立憲政治』である。右に出た幾多の憲法史學者の著書は、あらゆる根本史料を搜索して精緻該博なる研

究ではあるが、最も基本的に必要なる、明治天皇の立憲政治に對する大御心に就いては、何等知るところがなかつたのである。

これは申す迄もなく、九重雲深き處、到底民間學者の窺知し奉ることの出來得べからざることであるから、我人ともにあきらめて居つたのであるが　渡邊君は、明治天皇御紀編纂に從事すること二十年、彼ら大隈家の文書を整理して遂に『文書より觀たる大隈重信侯』の名著あり、今は奉祝公追頌會にあり て、伊藤博文の傳記編纂に從事して居り、又明治文化研究會の有力なる中堅として活躍して居る。正に絶好の適格者として、茲に『明治天皇と立憲政治』の著が出で來つたのである。

本書の内容は、第一、立憲政治と明治維新。第二、天皇御親政の完成。第三、憲法制定以前に於ける明治天皇と立憲政治。第四、憲法發布以後に於ける明治天皇と立憲政治。第五、明治天皇と政黨。との五篇に分れ、これに緒論と結論とがある。この編別を見た丈けでも、多言を要せないのである。しかもその叙述は、單なる觀念論や、概念論ではなく、一々正確なる根本史料に據つて論斷してあり、寧ろ筆端は遠慮して書き盡さゞる點あるにあらずやと思はるゝ節もある程に、嚴正なる史學者としての立場を忘れられさらんと努めて居るものゝ如くである。

以上の各篇の中に、更らに幾多に區分されてあるが、その中でも、立憲政治に對する御教養。立憲政治に關する一貫せる叙慮。明治天皇の立憲的御態度。憲法中止の議に御耳をかしたまはず。の章の如きは本書にあらずんば知るを得ざるの事實である。

法律家、政治家は固より一般國民に向つて此の書の再讀三讀を勸むるものである。

膨脹の日本

鶴見祐輔著　大日本雄辯講談社　四六判　〇、五〇

明治年間に於ける我國の膨脹躍進が德川二百有餘年の鎖國に基づく自己沈潛の賜であつたことは多くの人々の認むる處である。而してその膨脹の極点は日露戰爭であつたが、これが一轉機として我國は國内的問題に沒頭する集中時代にかへり、社會改造はその重要なる民族的關心事となつた。加ふるに國内に急速に起りつゝあつた人口增加は一日盜安を許さない民族死活の問題であつた。

然るに歐洲戰後日本移民禁止、日本商品の海外進出阻止、外國領土不可侵等の墻壁は高く日本民族發展の前途に築かるるに及び國運の前途を憂ひ、民族の消長を想念する識者の深憂は洵に言語に絶するものがあつた。

この時にあたり滿洲事變、米國の大恐慌、歐洲の政治並に經濟的混亂は期せずして起り、今や我民族は決河の勢を以つて膨脹前進の一途を驀進しつゝあるのである。

然しながら有爲の民族の膨脹前進は單なる本能的衝動であつてはならない。脚下に横はる大いなる危險の數々を凝視し反省することを忘れてはならないのである。

この躍進途上の日本國民面前に一大獅子吼を試みたものが本書である。

著者は先づ日本民族の尊き使命を說き、この使命の達成には希臘羅馬の興亡、近世の覇者英國の消長を最大の教訓として國民的理想の確立を縷述し、最後にこの使命を遂行すべき英雄の出現を待望して居る。現代の要求する英雄は最後に要約されて居る。

言々盡く愛國の大文字、句々盡く民族發展の羅針盤、我々は隨處にフイヒテの「獨逸國民に告ぐ」の

風格を發見する。これ敢へて江湖に推す所以である。

滿洲から北支へ

神田正雄著　海外社　四六判　一、五〇

滿洲、北支に關する著述は所謂汗牛充棟も啻ならぬ狀態である。然し一部分に偏せず、又瞥見に終らず、大所高所よりこれを觀察し、局に當る主要の人物と會談し、國策の遂行を阻害する行動に對して所信を卒直に語る本書の如きは蓋し多くはないであらう。

目下物議の中心となつて居る成都に中國人の教育にあたること數年、又某新聞の北平特派員として在平十餘年に亘り、滿洲、北支を恰も第二の故鄉とする著者の滿洲觀、支那觀には獨特のものゝあることは否定することが出來ない。

言ふまでもなく滿洲は我が生命線である。この生命線を眞の生命線たらしむるには、そこに釀成されつゝある幾多の問題に對し國民は深く思ひを致さなければならないものが少くない。この點についての著者の批評觀察は取つてもつて他山の石とするに足るを信ず。

蔣介石と現代支那

吉岡文六著　東白堂書房　四六判　一、五〇

支那問題はなぜこんなにわかりにくいか。それが先づ問題となり得る。あたりまへのことのやうだが支那問題は支那の現實に即して具体的に考へられることが何よりも先づ必要なのである、そしてこのあ

たりまへのことが實は今日の支那問題の批評に最も缺けてゐるのではあるまいか。

若し支那の現實をまのあたりに見るものは、恐らく支那を一個の獨立して近代的國家と考へることを躊躇するであらう。

なる程支那は蔣介石の西南工作着々効を奏し、更に新聞の傳ふる所に依れば、蔣介石は進んで北支にも工作の鋤を入れんとしてゐるといふ。かくて、全支は今や日毎に蔣介石の獨裁的權力の下に統一へされつゝあるが如く見える。

しかし、試みに蔣權力の背後からソ聯邦を除き英國を除き米國を除いて見たら何が殘るであらうか。多少の言ひ過ぎを敢えてするならば、支那とは、蔣介石の武力と財力とを中心として、日・露・英・米の各國の勢力が巴の如くに相錯綜して互に喰み合つてゐる狀態であると定義することが出來るかも知れない。要するに今日の支那は、蔣介石の支那であると共に、英國の支那であり、米國の支那であり、ソ聯の支那であり、そしてまた日本の支那である。そこに獨立した中華民國といふ國家——少くとも近代的國家は存在しないのである。

この現實をはつきり握んで支那問題を見る者のみよくその眞相に觸れることが出來るのだ。

徒に歐米流の國家概念を振りかざして支那問題を論ずるものは、謎の國支那を前にしていつまでも腕を拱いてゐなくてはならないであらう。

本書の著者吉岡文六氏は新京日々新聞の記者として永らく支那にあり、よくその現實を見て來た人である。本書の正しい立場は「蔣介石と現代支那」といふ表題からも充分に察せられるであらう。

波高し太平洋 米國とその極東政策

藤岡啓著　東京日日新聞社　四六判　一、五〇

我々は決して太平洋を距つる米國と事を構へることを好むものではない。また日米の間に今日戰爭で解決しなくてはならぬ程の差迫つた問題は一つもない筈である。それだのは、率直に我々の氣持をいふと、何かしら米國が氣に喰はないのである。

最近の日本の國際的のし方は正に世界の驚異であらう。それはアメリカにして見れば恐らく日本が感じてゐる以上に氣に喰はんことであるに相違ない。そしてこのお互に氣に喰はんといふ國民的氣分こそ實は大いに曲物なのであつて、諸々の行動的なものがしばしばこの上に踊らされてゐるのである。これまでも、われわれは幾度日米戰爭來を口にしたことか。

軍縮會議は當然のことながら悉く失敗に終つた。米國は無論日本海軍を假想敵としてその太平洋作戰を進めることであらう。

われ〳〵は今日米國を恐れる必要は少しもない、けれども米國を知ることは此の上もなく必要である。兩國民の間に動く氣分の何から來るかを知る爲に、戰爭を無用のこととして米國民と手を握る爲に。そして不幸戰爭の避けられなかつた秋にわれわれが勝つ爲に。

この目的の爲に、即米國をよく知る爲に必讀の一書として本書を推す。

自序の一節に「本書の目指すところは、二十世期の一大怪物たる米國の政治、外交、軍事を日・滿・支の視角からメスを加へると共に、米國の經濟帝國を俎上にして、米國對日滿支の通商經濟關係を研究し、云々と」以て本書の抱負と內容とを察するに足るであらう。

南進論

室伏高信著　日本評論社　四六判　一、〇〇

大陸政策か、南進政策か、今日、日本は何よりも先づこゝに確乎たる方針を立てゝ進まなくてはならない。

本書は題して「南進論」といふ。旗幟極めて鮮明である。聊さかも時勢に媚びんとする風はない。我我は必ずしも本書の所論を全面的に是認し得るものでない。しかもこの著者の自信と情熱には強く打たれない譯には行かないのである。

殊に對滿策を中心とする對支並に對露策は、今日我々の直面する最も重大な問題であつて、その重要性に於て決して南進政策に席を讓るものではない。寧ろ大陸政策こそ日本が、東洋の平和、從つて世界の平和を保證せんとする君子國としての使命を果すべき所以の王道であると考へられるのである。

けれ共も、日本の自から王道と信ずる大陸政策は、世界の殆んど凡ての國々から、侵略政策と誤認されつゝあるのを見るとき我々は少くとも、この著者と共に一應反省をするところがなくてはなるまい。

要するにこの著は情熱の書である。燃え上る情熱を以て一氣呵成に書かれたが故に、強くわれわれの胸を打つものがあると共に、多少一面に偏した說き方がなされてゐる嫌がないとはいへない。

しかし、我々は、その强調された一面の眞理を學びとると同時に、その否定された他面に於て、自己批判の一層價値多き機會を捉へることが出來ると思ふ。

日本をして眞に日本的な正しい方向に進ませることは吾等日本國民の、わけても日本青年の世界史的な責任であると共に、またその最大の誇りでなくてはならない。

本書はこの如き青年の自覺を促すに役立つところが大であらう。

現代支那概論—動かざる支那
現代支那概論—動く支那

矢野仁一著　目黒書店　四六判　各二、三〇

日華關係は正に運命的である。從つて兩國人は好むと好まざるに關はらず、永却に密接なる交渉を持續するの外はない。然るにその關係を圓滑にし所謂東亞永遠の平和を確立することの必要は既に久しく强調されたところであるが、舊態依然として相剋する所以のものは果して何に基づくであらうか。筆者は之を兩國人の相互理解の不足に歸すべきであらうと考へる。相互の理解は啻に爲政者の外交的辭令に依るべきではなくして、兩國民性の根本に觸れ、歷史的事實に裏づけられたものでなくてはなるまい。

著者は現在支那論者の二つの型——昔日の支那に非ることを說くもの、共の舊態依然たるを說くもの——檢討し、その何れも支那問題の一面觀に過ぎずとなして居る。

而して「支那問題の複雜性は世界歷史の潮湧の如く押寄せる大勢の力と、數千年來積疊せる歷史的傳統の力とが同時に支那に働きつゝあるがためである」といつて居る。前者即ち世界の大勢に基づく支那の一面を「動く支那」に於て觀察し、後者即ち歷史的傳統に彩る支那の一面を「動かざる支那」に於て檢討して居る。

「動く支那」の樣相は主として支那の邊彊問題並に對外關係である。此處には「一國領土の要求に反し國の主權によらず、或は國の主權が行はれないといふことの爲めに、政治上、經濟上、軍事上等に於て列國と種々の關係を生じつゝある」所謂邊彊問題を歷史上及び現實の事情から詳細に論究して居る。

「滿洲は支那の領土にあらず」との命題が著者の歷史的研究の結論として生れるのは所以なしとしない「動かざる支那」には主として支那の社會、政治に關する組織並に思想を史的に考察して居る。此處で我々の最も多く敎へられる点は支那の德治主義と共和政に就いてゞあらう。德治主義の帝政は清朝によつて一旦共の終結を告げ、新に共和政治が實現したが、その共和政治は熱烈なる國民の輿望即ち支那人の深い自覺に基づいて生れたものではなく、從つて帝政時代の惡政を、そのまゝ繼承して居ることを詳細に述べ「眞の共和政治を建立する爲めには支那全國の人民が否が應でも一致協同してこの困難を排除するだけの大決心をなさなければならぬ」と結論して居る。これ等の論策は寧ろ民國人への反省の資とすべきであるが同時に我國人にもかくの如く透徹せる支那觀があつたならば兩國提携の將來に資することは尠くないであらうと考へる。

而してこの「動く支那」と「動かざる支那」觀は相待つて著者の現代支那觀を完くするものであることは言ふまでもないが、我々はより多く「動かざる支那」についての理解を深めることが、隣邦の理解に貢獻するであらうと思ふ。

何れにしても支那研究の權威たる著者の論策は目下の日華關係整調の基礎として我が國人の大いにかんとするところであることを思ひ、江湖に推したいと思ふ。

明治天皇と軍事

渡邊幾次郎著　千倉書房　四六判　一、五〇

明治天皇が不出世の英主にましまし、國利民福に大御心を注がせ給ひしことは、敢へて此處に喋々の

要を認めないところである。

本書は前帝室編修官たりし著者が軍事に關する大帝の御事蹟御精神を取りまとめたものである。第一部「明治天皇と國軍」は徴兵令の發布軍人勅諭の渙發、平時の大演習、近衞師團の完成等に關しての御事蹟を述べたものであり、第二部「明治天皇と日清戰爭」第三部「明治天皇と日露戰爭」はこの國を賭しての両役に際して天皇が如何に宸襟をなやまし給ふたかを如實に記述したものである。

その內容は斷片的には或は教科書に或は御製に、或は其他の記錄によつて人口に膾炙されて居ることではあるが、細部に亘り叡慮のあるところを具さに物語り、これを一本に收められて居るので、皇軍今日の基礎を築き給ひし不拔の靈慮を拜するには洵に好適の書である。

今や國家超非常時に際會し、肅軍の聲又都鄙に喧傳せらるゝの時、大御心を回顧し、軍民一致聖恩に對へ奉ることは臣子の本分ではあるまいか。敢へて本書を推す所以も亦此處にある。

現代の陸軍 現代の海軍

伊藤政之助著　匝瑳胤次著　大日本圖書株式會社　四六判　各一、〇〇

世界大戰で戰爭の慘禍を深刻に体驗した歐洲諸國はもとより、近時米國や支那に於ても、平時並に戰時に對して、國防の見地からそれぞれ國家總動員の組織制度を確立し、また大學其他の學校には戰爭學國防學等の講座を設けるものも少からずあつて、國を擧げて所謂「國防國家」の實現に努めて居る。

我國でも最近非常時意識の現はれとして、國防を主眼とする國策が特に重要の地位を占め、一方一般國民の間でも、國防問題乃至軍事問題が眞面目な關心の焦点となりつゝあることを見るのである。

我々はこゝで必ずしも近き日に於て某國との間に戰爭が起るか否かを問題にする必要があるのではない。國防・軍備は決して戰爭のみを目的とするものではないからである。

しかし、戰爭を目的としないといふことゝ、一朝某國との間に戰爭の起るべき日を豫想するといふこととは全く別問題である。國防・軍備は相對的のものであるから、或特定の一國又は數國を「想定敵國」とすることによつて、何が合理的な國防乃至軍備であるかが具体的に考へらるべきは當然である。そして、民族的・傳統的・地理的・經濟的等の諸條件は、かかる想定敵國を定むる標準となるであらう。

かくて、我々は先づ滿洲を中心として露・支両國に對し、次に支那を舞臺として、支那自身はもとより、米國を始め、英・獨・佛・伊等の各國とも對立する。故に我が國防・軍備は、これ等の諸國の現勢を眼中に置かずして考へることは出來ない。

こゝに薦める二書はそれぞれ陸軍及び海軍の權威者が、一般國民の國防常識涵養に資せんが爲に書かれたもので、現代に於ける列國の陸海軍の情勢を知らしめ、帝國國防の今日如何に急務であるかを悟らしめるに役立つであらう。

自然科學

天文や氣象の話

藤原咲平著　岩波書店　四六判　一、二〇

日本ほど天災の多い國はない。時々起る大地震は別としても、何年をきかには凶冷に襲はれるし、年に五六度は颱風もやつて來る。その外に多少災害を醸す程度の暴風雨や雷雨降雹なぞを數へれば年々夥多しい回數になる。天災だからと云つて諦めて仕舞へば夫れまでだが、是等の天災は全然防禦は出來なくとも、努力の仕樣に依つては災害丈けは大に輕減が出來る。況んや人命丈けならば、何とかして墮さないで濟もうと思ふ。夫には是等の天災に對する智識の普及が何よりも先決問題になる。藤原博士は一方では東京帝大の敷授として氣象其の他の災害科學の根本的研究をせられてゐるし、一方では中央氣象臺の技師として豫報の現業に從事してゐられるから、此種の智識の普及に乘り出される學者としては第一人者である。此書物は同博士が諸種の會合に於て、大衆向きに講演したる速記錄と諸種の雜誌に執筆された大衆向きの報文とを選擇し、適當に順序を附けて、編輯した上に、多少之を添刪して書物としたものである。四六版三百頁の手頃の冊子だが、內容は盛澤山である。之を擧げると、一、大氣の成層二天氣豫報に就て　三、室戸颱風と其の教訓　四、颱風瑣談　五、暦の知識　六、天文と氣象の話　七、家庭生活と氣象　八、日本の氣候に就いて　九、水と濕氣に就て　十、山の氣象とその急變による遭難　十一、遭難記事に就いて　十二、ベルゲンの濕原、の十二章から成り立つてゐる。即ち書名が天文と氣象の話とあつても實は氣象の話が主となつてゐて、天文は十二篇中二篇しかない。是は著者の專門が氣象學だから當然首肯さるべき事柄である。

偖大氣の成層の章に於ては、大氣の釣合と成層の大要を說明し、類似の論法によつて人事方面の事象を解釋せられ、近世の思想問題にも觸れてゐる。是なぞは只の理學者じや到底云へないことだ。次に「天氣豫報に就て」の章では日々ラヂオや新聞で報導される天氣豫報の發布されるまでの方法を判り易く

說いてゐる。その次には「室戸颱風の其の教訓」では一般に颱風の特性を說明し、暴風警報に注意すれば少くとも生命の保護丈けは出來ると云ふことを實例を擧げて說かれてゐる。「暦の知識」と「家庭生活と氣象」の二章は常識として誰でも知つてゐなくてはならないことを判り易く說明された。「山の氣象」や「山の遭難」は、山に生れ山に育ち、山に親んでゐて、然かも氣象事業の當事者である著者でなくては書けないものだ。この二章を讀まれて、その教訓を實行されゝば、山で遭難する樣なことは先づ無くなると思ふ。章中山で霧にまかれて、咫尺を辨じなくなつた場合の心得なぞは著者が青年時代の体驗から書かれたものと思ふが、實に適切なもののみだ。最後の章の「ベルゲンの濕原」は僅かに六頁の短文だが是は地理學徒には見逃すべからざる大文字だ。著者が那威に留學中に實地踏査から得た濕原の記述である。

書中の多濕の岩山に放牧してある如き羊種を本邦に輸入して山地に飼育して見たらば羊毛自給の一端にはなりはせまいかと云ふ樣な類の濟世の言が處々に見出されるのは、著者が決して單なる理學者ではなく熱烈なる愛國の志士であることを裏書きする。

要するに本書は種々の意味からして大衆向きの好著述であると思ふ。

暦と迷信

鈴木敬信著　恒星閣　四六判　一、五〇

われわれの日常生活の中から凡て不合理なものを除き去つて了ふべきだといふやうなことは出來ることでもないし、またよしそれが理想としていはれるにしても甚だあぢきないものの考へ方であると思ふ。

人生にうるほひを與へまた妙味を添へるものの内には何かしら不合理なところのあるものが多いのではなからうか、われわれは理想をいふときにも人生の不合理なものの存在を或程度まで許していゝと思ふ。例へば神を敬ふときにでも理性の上で神の存在が證明されてからでなくては頭が下らないやうな合理主義よりも失張「何事のおはしますかは知らねども」といふやうな不合理のところにほんとの神のありがたさがあるやうに思はれるのであるまいか。

しかしそれにしても今日科學全盛の時代に、もろもろの不合理の領域が不斷に狹められて行くことはもとより尊重され祝福されなくてはならない。かくて無智の産物である迷信の如き人生に有害なものは最早や今日の文化と共に存在を許さるべきではない筈である。ところが實際は天地五行說とか九星或は六曜の如き愚にもつかない迷信の數々が今尙白日の下に巾を利かせて我國民の生活に多大の損失を與へてゐるのは眞に嘆かはしいこととといはなくてはならない。

これ等の迷信は少しく吟味するならば如何に荒唐無稽のものであるかゞ容易に了解されるのであつてそれ等を信ずる事が何んなに馬鹿らしいことであるかを悟る事の出來るものである。

本書は東京科學博物館の天文氣象部主任たる鈴木氏が今日行はれてゐる多くの迷信中暦と關係あるものを選びその正体を暴いてその由來の低級にして今日全く存在の理由を有ち得ざる所以を科學的に紀明したものである。卷末に掲げられた萬年暦は月齢の算出、潮汐の時刻、日食月食の日時等を知るに便利である。

趣味の植物採集

牧野富太郎著　三省堂　四六判　一、五〇

近頃停車場や乘物の中で、胴籠を肩からつつた植物採集家をちよい〳〵見かけるやうであるが、勿論專門の人が大部分であらうが、中にはアマチュア採集家も相當見受けるやうである。本書は專ら之等アマチュア採集家の爲に、平易に植物採集並にその整理の方法を示したものである。

最初に序論的に植物採集の意義について簡單な說明がなされてゐる。即ち植物を學術的に觀察する上に、採集と云ふことが如何に必要であるか、またアマチュアの單なる植物趣味から云つても如何に面白いものであるかなどに就いて。

次に採集の方法であるが、こゝで色々使用道具の選擇說明迄懇切につくされてあるが、特に採集胴籠について著者自身の考察になる、牧野式胴籠を推稱して居られるが、別に宣傳と云ふ程の意味もないやうである。これ迄が大体序論めいた所であつて、以下順次、四季折々の採集さるべき植物の種類、採集好適地の案内、標品の製作法について、恰も講演の樣な平明さを以て語られてゐる。尙卷末に、植物標品の歷史的考証にわたる數篇が收められ、之等の中には「植物學雜誌」などに既に發表されたものなどもある。

以上の如く本書はあく迄「趣味の植物採集」であつて、アマチュア採集家の入門手引として企てられたものとして好きものである。

野鳥禮讃

內田清之助著　巢林書房　四六判　一、八〇

數年來新聞や雜誌に發表されたもの、或はラヂオ放送の原稿など十八篇を蒐めて上梓されたもので一

般隨筆として特にすぐれたものとは思はれないが、唯內容が著者專門の鳥類のみに關する隨筆であることが特色である。「私ども鳥類の保護に從ふ者」と自ら稱して居られるこの著者が、鳥の習性を、又生態を長年の觀察に基いて事もなげに隨筆風に書き流してある。畫家が四角四面に緊張して描いた鳥の畫を評して「この繪では頭が小鷺で、脚が中鷺」といつた工合に、云ふ所にも鳥學者らしい細かい觀察と專門家らしい自信のほどがほの見えて、事實の正確さが自づと讀む者の心をとらへてゐる。

又五百年前から現代までに地球上で絕滅した鳥の種類が百四十種もあり、凡そ二年半に一種類づゝの鳥が絕滅した勘定になると聞かされては、「鳥類の保護に從ふ者」ならずとも、いさゝか敎へられるところがある樣に思はれる。

別段記述に一貫した系統があるわけではなく、鳥に關する知識を與ふるものとしては甚だ損な本であるが、趣味的な讀み物として讀書子の机上に占むべき本書の位置は必ずあることと思ふ。体裁も荒木十畝畫伯描く所の見返しを用ひた上品なもので、挿入された十數葉の寫眞もまことに美事である。

日本の星

野尻抱影著　研究社　四六判　一、五〇

「日本の星」と云つても、日本でだけ見える星と云ふ意味では決してない。世界の人類が共通に見てゐる星に、例へば「すばる」とか「はなばた」「ひこぼし」とか云ふ風に日本人特有の呼び方をしてゐるが、それについて考證的に記したのが本書である。枕の草子にある樣な「星はすばる、ひこぼし、明星夕つゝ云々」と云ふ樣なのは我國何處へ行つても通用する古典的な呼び方であるが、中には奧州だけしか通用しないと云ふ樣な方言的な呼び方もある。この樣な星の和名が本書には百幾つか集められ、之を星の見える時期に依つて春夏秋冬の四季に分ち、その各々について、その呼ひ名の由來、傳說、萬國共通の學名との關係等について語られたものである。天文隨筆としてあるが、同じ著者によつてものされた從來の數多くの天文隨筆――夫等は多くは神話傳說を主とした讀物であつたが――それに比較すると本書は讀み物としての興味よりは寧ろ考証的な研究書と見るべきであらう。

美術、諸藝

美と工藝

柳宗悅著　建設社　四六判　二、〇〇

本書は最初「下手物とは何か」といふ題で出版されたのであるが、この再版に當つて、慣れない讀者に疎遠な感じを與へるのを避けるため「美と工藝」と改められたのである。

「なぜ『下手物』が私の心を强く引くか」と『下手物』から何を私が學び得たか」の各篇に分つて、「下手物」の意味とその美の發見、「下手物」の創作とその社會的位置を究明することによつて、民衆と工藝との關係、言ひ換へれば生活と美との交渉に深い考慮を拂つてゐる。

已に民藝の理論家として定評ある著者が、最も具体的なる民衆の所產としての「下手物」を通して、

藝術の眞諦を說き、民衆の重大な意義をそのABCから細心に縷述したものである。著者は「下手物」に文化の諸問題の縮圖を見、それを世界的にまで擴げて行くことによつて、それは工藝乃至美の問題に終るのみでなく、如何に生くべきかの問題、引いては道德や宗教の諸問題にまで連關を及ぼしてゐる。著者が之を尋討する事は、自然や人間の秘義を解く鍵を與へてくれると思はれるといふ所以である。人間の日常生活に美を即せしめる道は民藝の外にない。かゝる意味の卒直なる藝術の眞諦を會得せんとするの士に本書の一讀を奬めたい。

耕筰樂話

山田耕筰著　清和書院　四六判　一、五〇

著者が三十年に近い樂歷の間の感想や、回顧や、時にふれての小論やを拾ひ集めたのがこの書である「未完成のインテルメッツイ」といふ本書の約三分の一を占めてゐる卷頭の長篇は、著者の自叙傳の素描であつて、恰も輕快な行進曲を聽くがごとく快適なものである。「音樂の法悅境」以下「シヤリービンの『ドン・キホーテ』までの二十數篇は音樂に關するとき〳〵の感想や小論であつて、或は自己の体驗を語り、或は歐洲の巨匠を語り或は現代西洋音樂を批評するなど極めて自由な放談を試みてゐるのである。著者のごときその道の達人が打寛いで語る言葉には普通一般の評論文には見られない慈味があり豐富な体驗を自らに感得せしめる趣がある。それら諸篇の內には「改造日本音樂の提唱」とか「論爭をやめて實行しよう」とか「邦樂の將來」とかその他日本音樂に關する意見を多く見るのであるが、讀者は著者が意外に日本音樂に對して熱意をもち、その將來の建設に努力してゐることを知り、改造日本音

樂が西洋音樂形式による日本音樂の創造にあるといふ意見に接するのである。著者の意見は体驗の豐富と潤澤とをもつて人を推服せしめるに足る極めて中正穩健なものゝやうである。

「アメリカの女」以下「ソヴイエト風景」までの四篇は著者の音樂行脚における印象記であつて、著者のコスモポリタン的な風格をおもはせるそれ〳〵興味あるものである。本書は音樂に關する絕好の讀物といへよう。

演劇巡禮

三宅周太郎著　中央公論社　四六判　二、〇〇

新聞劇評を天職と心得、又自らを戒むるに「演劇の檢事に非ずして判事の心」を以てし、嘗ては、この天職の故には現世の利慾を離れて斯業に忠實ならんと天下に誓言した（同著「憎まれてのびる劇壇」〔昭和四年〕より）殉教者的熱情をして、畢竟自分にとつて演劇は「心の聖地」であると述懷せしむるに至つた（同著序文）最近までの著者の近業を纏めた同著は、演劇に對する著者のさういふ敬虔さの故に殆ど鑑賞の聖書といつてもいゝ香氣と襟を正さしむる端正さに滿ちてゐる。演劇の美神は妖しき魅力を放つ。放恣なる淘醉の徒は多いが、著者の如き端嚴なる奉仕者は殆ど絕無だ。而もこの巡禮記錄は行文流麗、どの頁を開いてゝも肩も凝らず爽かに興趣深く讀ませる。同書は第一俳優評論及び芝居の見方、第二歌舞伎劇評話、第三演劇隨筆、第四新聞劇拔萃、第五亡き人を思ふの五部より成つて居るが、著者の最も得意とし研究を積んで居る歌舞伎俳優の藝風や型について語る際最も精彩を放つやうに思はれるが、他の人に語らせたならば衒學的とさへ感じさせようその點についての饒舌もひたむきな態度の故に

救はれてゐるが、現代の一般の演劇愛好者には寧ろ煩冗に過ぎる憾がありはしまいか。著者は卷初に芝居の見方を敎へ、同書もガイドブックたらしめん事を期してゐるが、藝風又は型に關して懷舊的比較研究の多い特徴から云へば、初心の鑑賞家の手引としてよりも、寧ろ今は亡き幾多の故名優の俤を偲び得る年輩の人又は玄人に近い人々にこそ迎へられはしないだらうか。即ち技功の末梢的批評に精緻にして演劇そのものの總括的批評、指摘等に比較的力弱き輕い不滿はあるとしても、動もすれば卑陋なる世界に孤昂として仰がるゝ運であり、尊敬すべき業績たるを失はぬ。

◉映畫讀本

來島雪夫著　書林絢天洞　四六判　一、八〇

都會といはず田舍といはず映畫は今や全盛の域に達してゐるにも拘らず、日本では今迄映畫全般に就いて概論風に書かれたものが尠なかつた。本書は此缺を補ふて、映畫全般について知りたいと思ふ者に基礎的並びに一般的知識を供給するものである。

抑〻映畫はその誕生から企業家の手によつて藝術としてよりも商品として育てられ、その全般にわたつて行屆いた解說を與へることは至難の業である。

本書の著者は「映畫評論」同人中でも篤學の士で、現に東京科學博物館敎育部に勤務されてゐる人で此の方面の理論に明るく、加ふるに本書は半歲に亘つて非常な努力を傾けられたものであるから、讀者は安心して讀むことが出來る。

本書は先づ「映畫の誕生」として映畫成立の由來より筆を起し、英米獨佛日蘇の「映畫事業」の狀況

を概觀し、映畫技術としてその「製作の方法」「製作費」の問題を詳述、「映畫化とプロデューサー」では歐米のプロデューサーを引合ひに出して日本のプロデューサー論に及んで居り、「映畫化と各專門技術家」ではシナリオ、撮影臺本作法、シナリオライター、監督術と映畫監督、キヤメラとキヤメラマン等に亘りその技術上の指導原理と實際運用を明らかにし、音響、照明、セットについても詳說してゐる次に「映畫の配給と興行」として映畫興業界の表裏を興味深く述べてゐる。

「映畫のジヤンル」として映畫種別に關して、ウイル・ヘイスの說を引用して詳說するところあつてから、當時流行の音樂映畫論に及んでゐる。映畫藝術論」としては映畫の本質性能に觸れた理論の展開として、一、機關主義の理論、二、文學主義の理論、三、心理主義の理論、四、文化主義の理論について簡單に紹介されてゐる。

要するに本書を讀む者は、映畫事業、映畫技術、映畫藝術の三部に亘つて、その基礎知識の概略が得られる譯で、著者の云ふ如き「映畫研究手引草」として上乘のものである。映畫に關する全般的知識を推薦する所以である。

ラヂオ演劇—鑑賞と作方—

佐々健治著　同文館　四六判　一、五〇

ラヂオ演劇とはラヂオ・ドラマ、ラヂオ風景、舞臺劇、脚本朗讀、映畫劇の五種を含めたもので、本書はその各々に亘つて初步の解說から鑑賞の方法、脚本の作り方、放送の略史等を述べたものである。

初めに放送室、マイクロフオン等の放送の機械的方面の說明があるが、誰れでも知つてをきたいこと

である。次に豐富に寫眞を挿入して擬音の解説がある。外でも紹介されたこともあるがこれ程に詳細なのは初めてで本書中で最も興味を惹くのはこの部分ではないか。次に文化施設としてのラヂオの機能に觸れてゐるが、ラヂオが、教育、教養、報導、娯樂の各方面に大童の活動を續けてゐて色々批評の餘地はあらうが、兎に角吾人の生活から引離して考へられないものであることい誰も首肯するであらう。終りに本書の主眼たる聽覺のみを通じて働きかけてゐるラヂオ演劇の本質を說き、その獨自性、普通の演劇との差異をあげ、參考として既に上演されたものゝ各種類に亘つて解說をなし、以上を綜合して、その鑑賞と作方との參考に資せようとしてゐる。著者はAK局員であり、既に長年に亘つてこの方面の研究者である。ラヂオ演劇に興味を持つ讀者の一讀すべき良書である。

茶道讀本

高橋龍雄著　秋豐園出版部　四六判　一、五〇

あらゆる方面に亘り、それ〳〵讀本と名づけられるものが出來てゐるのに、茶道だけにその讀本がなかつたといふのは、どういふ理由であるかといふに、茶道は日本文化の骨董的綜合藝術であつて、書畫骨董を初め、陶器漆器釜工より茶室の建築、之に伴ふ築庭、又懷石料理及禮儀作法に至るまで、なかなか文章では書きあらはし難い爲に、非常にむづかしいものであるからだ。

箒庵翁は、茶道に精進せらるゝこととゝに四十有餘年、又文筆に於ても頗る達者であるからで翁をおきて茶道讀本を著作し得る人はないのである。

本書はまづ茶道の沿革を三段に分けて說き、第一章茶道前記に於て、茶の起原から喫茶の風が一般に

行はれた次第を叙し、第二章茶道本記に於て、珠光、紹鷗、利休に至る茶道の創立から大成に至る徑路を說き、殊に信長と秀吉とが茶道の一大後援者であつたことを、說かれてをる。

次に茶室、茶會、點茶を簡明に記述し、一度も茶會に入つたことのない人にでも、茶會に列席して恥をかゝない程度に說明してある。殊に茶室内の道具、即ち掛物、花入、釜、茶入、茶碗、香合、水指以下の諸道具は、最も說明に骨を折るものであるが、流石に茶臘四十有餘年の翁の手腕は、すら〳〵と說き來り說き去り、茶器全般の物に涉り、一般的の知識を與へることに於て、老熟の筆致が運ばれてをる。

最後の茶訓、茶讃は、茶書中の有益にして趣味ある逸話を列記し、茶道に對する古來の認識不足な點を懇篤に說得し、茶道が日本文化の上に多大の貢獻をした點を述べ、將來の日本が、世界に誇示する模範的風流道の立場に於て、世界を指導すべき所以を高唱されてゐる。

要するに、茶道は茶界の實物教授、茶室茶庭の實見の上ならでは、容易に讀本などで說明の出來るものでないのを、本書はこの最も學者が難事としてゐた点を容易に成し遂げたものである。

美術工藝の日本として、風流風雅が修養道であるものとして、世界に誇るに足るべきものは茶道であることを知らしめるのは、所謂日本精神の呼聲の高い現代に、極めて必要なことである。

この点に於て、本書は現代の缺陷を補ひ、現代の要求に應じて現はれたものであると思ふので、敢て一般の讀書界に本書を推薦する所以である。

産業

◉日本工業政策

吉野信次著　日本評論社　四六判　二、〇〇

本書は現代日本工業全集の第三卷となつてをり、著者は現商工次官といふ專門家の專門的な著述といふべきものである。書目を見ると本全集は現代日本工業に關する專門的な知識の通俗普及化を目的としたものゝやうである。

本書は日本工業政策の全般を說いて日本產業の發達振りを知らしめるといふものである。世界大戰後急激に發展を來した日本產業界に、いかなる政策がいかにして現れ、いかなる經過をとり、いかに作用して來たかを當局者としての詳密さをもつて說述してゐるのである。國際勞働政策より基礎工業政策、中小工業對策より工業金融政策、產業統制政策といふやうに、全般の政策問題に及んでゐる。

我國が今日異狀の產業發展を來してゐるといふことは誰しも知つてゐることであるが、その實際を審かにすることは容易でない。さらにそれに對して國家がいかなる對策を施してその發達を助長して來たかを知るものは稀なのである。本書のやうな專門家の詳細な著述は、たゞに從業者や特殊研究家に對して好箇の參考となるばかりでなく一般國民にとつても國民經濟への關心を高める上に稗益あるものとおもふのである。

農村工業讀本

佐藤富治著　明文堂　菊判　一、五〇

農村工業の問題は工業資本による都會工業の再生强化策として、最近異常の關心が拂はれてゐる。と同時に、他面農村に於ける窮乏の打開策としても多くの農民から一定の條件の下に相當の熱意を以て迎へられてゐる。本書は即ちこの農村工業に關する大体の題目に觸れ、記述明快平易、その關係者にとつては有益なる參考書である。著者は社團法人農村工業協會の常務委員である。

漁村に輝く人々

水產學校長協會　大日本水產會　四六判　〇、九〇

本書は水產學校長協會によつて選奬された水產學校卒業生中の業績優秀にして他の模範となるべき人人の事業を世に知らせるために輯錄したものである。

漁村の開發振興に努めたる者、漁業經營に宜しきを得範を業界に示したるもの、水產製造の改良に私財を拋ち、或は世の嘲笑を物ともせず漁具法の改善發明に意を注ぎたる者、或は北洋漁業、南洋漁業の開拓に貢獻せるもの等其の數九十八名に及ぶ。本書は實業漁村の青年の讀物として最も適切であらう。

產業組合國民讀本

有元英夫著　更生社　菊判　〇、三〇

本書は一般國民に產業組合とは如何なるものかといふことを平易に知らしむるために發刊されたもの

である。目次は「産業組合の意義」「産業組合の種類」「産業組合の組織」「産業組合運動の發達」「産業組合の本質」「信用組合」「販賣組合」「購買組合」「利用組合」の八課になつてをり、休裁全く教科書風である。

内容も教科書風の概括的な荒筋の説明に止まつてをり、教科の實際に當つて、これを敷衍しもしくは實例をひいて具体的の説明教授すべく出來てゐるのであるが、産業組合の全般に亘つて略一通りの叙述を與へてゐる。

附錄

著名發行所一覽

アトリエ社	牛込區北町三〇	大阪屋號
アルス	神田區神保町三ノ一三ノ一	大塚巧藝社
青山書院	赤阪區青山南町三ノ三三	科學知識普及會
朝日新聞社出版部	麹町區有樂町二ノ三	改造社
梓書房	大阪市北區中之島三ノ三	學藝社
天沼研究所	神田區小川町一ノ一〇	學而書院
育英書院	杉並區天沼二ノ四九四	金刺芳流堂
一元社	澁谷區千駄ケ谷四ノ七二〇	金原商店
岩波書店	本郷區弓町一ノ二五	巌松堂
内田老鶴圃	神田區一ツ橋二ノ三	考へ方研究社
芸艸堂	日本橋區大傳馬町一ノ四	共益商會
オーム社	京都市寺町通二條南入	共立社
大岡山書店	本郷區湯島一ノ一	教育圖書株式會社
大倉書店	神田區錦町三ノ三	教育圖書出版社
大倉廣文堂	麻布區一本松町二七	金港堂書籍株式會社
	日本橋區茅場町一ノ三	警醒社
	京橋區京橋一ノ八	健文社
	日本橋區吳服橋二ノ五	研究社
	本郷區金助町四五	
	神田區錦町明治書院ビル	
	芝區新橋七ノ一二	
	京橋區銀座西八ノ五	
	神田區松永町二一	
	神田區神保町三ノ九ノ一	
	本郷區湯島切通坂町二二	
	神田區神保町二ノ二	
	神田區一ツ橋二ノ三	
	芝區松本町四四	
	神田區駿河臺三ノ九	
	小石川區大塚仲町四一	
	大阪市西區京町堀通三ノ一	
	神田區神保町三ノ八	
	京橋區銀座西八ノ九	
	神田區美土代町一	
	麹町區富士見町一ノ五	

古今書院	神田區駿河臺二ノ一〇	
工政會出版部	神田區旅籠町三ノ四	
弘文莊	本郷區西片町一⊙	
厚生閣	麹町區下六番町四八	
高陽書院	神田區小川町一ノ一	
サイレン社	神田區一ツ橋二ノ九	
三省堂	神田區神保町一ノ一	
三海堂出版部	神田區神保町二ノ一	
四條書房	神田區駿河臺二ノ一	
至誠堂	日本橋區本町四ノ一五ノ五	
至文堂	牛込區拂方町二七	
時習館	下谷區下車坂町一五	
時潮社	芝區田村町五ノ二三	
實業之日本社	京橋區銀座西一ノ三	
受驗界社	麹町內幸町一ノ三	
春秋社	日本橋區吳服橋二ノ五	
春陽堂	日本橋區通三ノ八	
書物展望社	京橋區新富町三ノ七	
章華社	目黑區中目黑二ノ五八二	
裳華房	麹町區中六番町五四	
新光社	神田區錦町一ノ五	
崇文堂	神田區神保町一ノ四五	
成溪學園出版部	豐島區池袋八六七	
成美堂	日本橋區通三ノ一ノ四	
政經書院	京都市中京區二條通河原町東	
誠文堂新光社	神田區錦町一ノ五ノ五	
巢林書房	神田區小川町一ノ一〇	
創元社	芝區二本榎西町二	
大同館	大阪市西區靱上通一ノ三二	
大同書院	神田區一ツ橋二ノ三	
大日本圖書株式會社	大阪市北區曾根崎町上三ノ八	
大日本雄辯會講談社	神田區駿河臺三ノ五	
大雄閣	京橋區銀座一ノ一	
第一書房	小石川區音羽町三ノ一九	
高岡本店	京橋區木挽町二ノ一	
玉川學園出版部	麹町區三番町一	
	神田區神保町一ノ五	
	淀橋區西大久保一ノ五一五	

千倉書房	京橋區京橋交叉點	
中央公論社	麹町區丸ノ內(丸ビル)	
刀江書院	神田區駿河臺三ノ六	
東亞同文會	麹町區三年町	
東京出版協會	神田區小川町三ノ八	
東京堂	麹町區九段一ノ七	
同文書院	四谷區仲町三ノ二二	
常盤書房	小石川區諏訪町五五	
內閣印刷局	麹町區大手町	
南光堂	本郷區春木町三ノ三二	
南山堂	京都市上京區寺町通御池南	
	本郷區龍岡町三一	
西ヶ原刊行會	赤坂區一ツ木町三一	
日本評論社	京橋區京橋三ノ四	
日本放送出版協會	麹町區內幸町一ノ三(幸ビル)	
培風館	大阪市東區北久太郎町一ノ三	
	神田區錦町三ノ一一	
白水社	神田區小川町三ノ八	
博文館	日本橋區本町三ノ九	
非凡閣	小石川區表町一〇九	
富山房	神田區神保町一ノ三	
佛教年鑑社	牛込區新小川町一ノ五	
平凡社	日本橋區吳服橋三ノ五	
明文堂	麻布區笄町一八〇	
	日本橋室町四ノ五	
寶文館	大阪市西區阿波堀通四	
北海出版社	麹町區飯田町一ノ七	
丸善株式會社	日本橋區通二ノ六	
三笠書房	神田區神保町三ノ六	
民友社	神田區錦町一ノ一六	
目黑書店	神田區駿河臺三ノ一	
明治書院	神田區錦町一ノ一六	
明文堂	神田區錦町一ノ四	
モナス	小石川區竹早町三五	
有斐閣	神田區神保町二ノ一七	
有明堂	神田區錦町一ノ七ノ一	
雄山閣	麹町區富士見町二ノ八	
吉川弘文館	京橋區京橋二ノ一一	
樂浪書院	中野區江古田一ノ二〇五四	

375
49

昭和十二年三月五日印刷
昭和十二年三月十五日發行

（非賣品）

廣島縣中央圖書館指定

編輯兼發行者　廣島市立淺野圖書館
廣島市小町參拾四番地

印刷人　佐野克己
廣島市中島本町八番地

印刷所　佐野印刷所
廣島市中島本町八番地

終